

〔巻頭言〕

## 本学会のさらなる発展に向けて 一次の10年への課題

日本家族看護学会前理事長  
三重県立看護大学学長

杉下 知子

新たな取り組みがはじまり10年を経過するところの取り組みは一般に歴史的事象の1つに数えられる。本学会が1994年10月1日に誕生し、その日に第1回学術集会在東京大学で開催されてからすでに10年7ヶ月が経過した。機関誌も本年第11巻を発行する運びとなりこれも10年を超えたことになった。編集委員のご尽力に感謝申し上げたい。さて本学会は1994年が国際家族年に当たり、10月1日は東大家族看護学講座の誕生日に当たるという点を追い風にして研究会ではなく学会として充足することにした。当時看護系の学会は看護科学学会や看護研究学会など総合学会が主で専門領域の学会は極く少なかった。筆者は本学会を学会として創設することの意義を次の点を挙げ説明させていただいた。

①ある学問が誕生した時点は、その領域の成書・教科書の初版発行日、学術団体創設日、大学教育プログラム開設日のいずれかで決められること。

②学術集會に参加する場合、研究会より学会の場合の方が出張参加が可能であること。

③学会は、機関誌の発行や学術集會開催など学問を形成発展させるための機能を持っていること。

④学術団体として認定されるためには当時日本学術會議に登録することが必要で学術団体設立から3年を経過し、会員数500名以上が登録申請の要件であったこと。

これらの点を勘案し、“日本家族看護学会”は学会として、歩みはじめることを選択した。

その結果、地域看護学会や老年看護学会より早く誕生したことになった。すでに1,200名余の会員を持つまでに発展した本学会の足跡を振り返る時、研究会ではなく学会としてスタートしたことは間違いではなかったことを証明していると実感し、本学会

の創設者として感慨深いものがある。

ところで新たな学問は一体どのようにして誕生し、新しい学問として認知されるであろうか。筆者は次のように考える。

①新しい方法論が開発され今まで扱えなかった部分を扱える様になる。

②問題解決を必要とする新しい領域を見出しあるいはその出現により、新しい領域の学問を構築することが可能となる。

例えば、電子顕微鏡やDNA解析法はそれまで扱うことが困難であったウイルスなどの微生物あるいは遺伝子の情報を扱うことを可能とし、ウイルス学や遺伝学の誕生・発展を促した。家族看護学はいかがであろうか。新しい方法論が用意され誕生したのか、あるいは家族という対象を扱うことになり、新たな学問領域として誕生し発展したのでであろうか。独自の方法論を用意したであろうか。

これらの点を検討する際に近い領域の学問との共通点、相違点を考えてみることは役立つと思われる。家族社会学、家族療法学、家族心理学、在宅看護学、地域看護学等との比較検討作業を学会としては是非取り組んでいただきたいと願う。

ところで、筆者は第7回国際家族看護学会の学会賞を2005年6月2日にカナダビクトリア市で開催の同学会で授与されることになった。受賞理由は、日本における家族看護学の発展への貢献が顕著であった点という。筆者にとり大変名誉なことであり日本の家族看護学が国際的に認められたことを実感した。同時に本学会の黎明期の辛苦を喜びとともに思い出した。次の10年に向け本学会が実践に基づく学術形式に向け、着実に発展することを心から願っている。